JEMS
JAPANESE EVANGELICAL MISSIONARY SOCIETY

RETURN SERVICE REQUESTED

ECFA ACCREDITED

Non-Profit Org.
US Postage
PAID
Los Angeles, CA
Permit 2112

JAPANESE EVANGELICAL MISSIONARY SOCIETY
948 East Second Street
Los Angeles, CA 90012-4317
Tel: 213.613.0022
E-Mail: info@jems.org
Web: www.jems.org

JEMS – 日語部 支援 : NICHIGO-BU SUPPORT

☐ 日本語部とスタッフのためにお祈りいたします。

☐ 日語部の働きのために　毎月 $_____ 捧げます。(　　月　　年まで)

☐ 今回 $_____ 捧げます。

Name _____ Phone _____

Address _____ City _____ State _____ Zip _____

E-Mail _____

チェックのあて先は**JEMS**とお書き頂き、Memo欄に**Nichigo**とご記入下さい。

JEMS　P.O.BOX 86047 Los Angeles CA　90086-0047　電話: 213-613-0022

※オンライン献金 **https://jems.networkforgood.com/projects/10875-minako** もご利用頂けます。

時報ーひとときの想い

西原 黎子

近所の公園に一周1/4マイルのトラック・フィールドがある。合成ゴム舗装で脚に優しく、毎日多くの老若男女が運動を楽しんでいる。ある朝、歩きにでかけ、トラックを半周ほど回ったころ、ひとりのお年を召した女性を目にした。彼女は両手に杖を持ち、ゆっくりゆっくりと歩を進めている。一歩前に出ると、バランスが崩れ、奇妙な体形になる。しかし次のステップをやめることなく確かに前に進んでいる。思わず声をかけたくなったが、彼女の懸命な姿に侵しがたい雰囲気を感じ、そっと横を通りすぎた。彼女は一周以上、歩き続けてていた。私はなぜか荘厳な気持ちになり、主を讃えずにはいられなかった。同時に聖歌588番の一句が聞こえてきた。「ひとあし　ひとあし　主にすがりて　たえずたえず　われはすすまん」

JEMS
JAPANESE EVANGELICAL MISSIONARY SOCIETY

マウントハーモン修養会
時報：2025年 夏

新しい歩み

マウントハーモン修養会日語部ディレクター
イーストベイフリーメソジスト教会　中浜 一郎師

何かに携わり使命感を感じつつ事を動かし進めていく中で、想像もしなかった事が起きた時に責任の重さが急に大きなプレッシャーとなってしまい、「今、私がするべき事は何ですか？」と大声で祈り求めたことが幾度となくありました。 あまりの突然の出来事に、どうしたらいいのかわからなくなり、血の気がさっと引くような感覚に捉われ、必死に主にすがりながらも、ひとり闇の中に取り残されたような孤独の時をも経験したことがあります。 ただひたすらに祈り、聖書に向き合う中でみことばが心に示され、聖霊様に目が開かれて、その時見えていなかった主のご計画の確かさに目が開かれ、前に進んでいくことができました。

聖書の中でも同じようなこの感覚を味わった人がいます。 使徒の働き15章36節からの章に目を留めると、使徒パウロとバルナバは二回目の異邦の地へ伝道に出かける計画と準備に取り掛かります。 彼らの異邦人伝道は、初代エルサレム教会で正式に認定され、モーセの律法を行わなくても、聖霊を受け、主イエス・キリストに救われた信仰者になることが承認されました。 アンテオケ教会所属のパウロとバルナバは感謝と喜びに満ち溢れ、次回の伝道旅行に大きな期待と希望に胸を膨らませていた矢先、見解の違いが生じ、激しい口論と争いに陥ってしまいます。 前回の伝道旅行の際、同行させたマルコがいよいよ未開の地に入ろうとした時に仕事を捨てて離脱したことが原因でした。 パウロはマルコを同行させようとは全く考えていませんでしたが、バルナバはこのマルコを連れて行くと決めていたからです。 結局、別行動をとることになりバルナバはマルコを連れて、最初の伝道地でもあり、バルナバの故郷でもあるキプロスにさっさと出発してしまいました。 使徒パウロはバルナバという偉大な同労者であり、誰よりもパウロの一番の理解者であった友をいとも簡単に失ったのです。 もともと2人1組として聖霊に聖別されてこの任についたのですし、1回目の伝道の時でも一度は死んでしまいそうな酷い迫害にも合いましたが、バルナバが居たからこそ福音を伝える事が出来、任務を果たせたことをパウロは身に染みて理解していました。「バルナバの代わりになる人物など決して他にいない。」その相棒がこうもあっさりパウロから去ってしまっては、これから何をすればよいのか全く考えることすら出来なくなってしまったのではないでしょうか。

使徒パウロは血の気が引く感覚を味わうことになりました。 ひとり取り残されたパウロは母教会アンテオケで、みことばと祈りの時間を持っていましたが、エルサレム教会の預言者シラスを同行者として選びます。 シラスは一旦エルサレムに帰っていましたから（15章33節）、彼が到着するまでパウロは改めて主のご計画に想いを巡らしますが、バルナバが何を思って去ってしまったのか釈然としません。 しかしシラスが到着し、アンテオケ教会の兄弟たちは新しい任務の祝福を信じ、バルナバが去ったが故の主の恵みが使徒パウロへの新しい歩みの上に豊かにあることを信じ、神様に委ねて出発します。 どんな時でもばく進する勇猛果敢な姿ではなく、二の足を踏んでいるようなひ弱なパウロの姿が垣間見えます。 ではバルナバの真意はどこにあったのでしょうか。 バルナバの名前の訳語は「慰めの子」です。（4章36節）しかし原語では「バル」は息子、孫つまり子の意を表し、「ナビー（ナバ）」は預言者という意味であり、「預言者の子」となります。 彼が慰めの子と呼ばれたのは、受け入れられないような出来事（預言の内容）に向き合う信仰の姿勢にあったからなのではないでしょうか。

与えられた預言を内住の聖霊の導きにあって、神様の祝福に至る道のりに起きる確かな手応えを覚える為の出来事として受け取る時、みことばに光がさします。 見えなかった物が見え、そして幾度も幾度も慰めをいただき、励まされ、何回も立ち上がれるのです。 この慰めの預言者バルナバが生も死も共に乗り越えてきたパウロと見解の相違だけで分裂するとは考えられません。 パウロもバルナバもエルサレム教会会議の結果、さらに大きな世界伝道のヴィジョンが進み始めている事を理解していた筈です。 ただバルナバはその為には異邦人への使徒として立てられたパウロがリーダーとなり、ローマ王国の中心に到達するために必要なチーム編成を祈り求めたと思います。 バルナバが受け取った導き（預言）は意外にもバルナバ本人が使徒パウロから離脱することで、新しい伝道チームは編成されるということでした。預言は成就されて初めてその祝福に授かります。 その祝福のためにバルナバはパウロの一番の親友であるからこそ、主のみこころに従い新たな宣教の旅に出たのです。
そして主はパウロにはルカを、バルナバにはマルコを伴わせられ、後にこの二人に福音書を書き上げさせられます。 パウロとバルナバは場所は違えど、救い主イエス様を伝える働きを同じ想いと同じ信仰によって、聖別された一つの伝道隊として歩み続けたのだと思います。 何という主の慈しみ深きご愛でしょうか。

2005年からマウントハーモン修養会日語部ディレクターに就任し、21年間、主はまったく不十分な私を選び出し、用いてくださりました。 毎年の修養会が素晴らしい主の祝福に満ち溢れましたことはただ主の憐みと励ましによるところで、多くの方々の尊いお祈りと奉仕によるものです。 またマウントハーモンに参加された方々が私の大切な友となってくださって、真摯に共に主に仕えてくださり、支えてくださったあの一週間は何にも勝る私の生涯の宝物です。 心よりお礼を申し上げます。 ありがとうございました。

素晴らしい主の御名を褒め称え、賛美いたします。

溢れる主の恵み

日本イエス・キリスト教団神戸中央教会　鎌野 かをり牧師夫人

マウントハーモンから帰ってきてから数週間経ちましたが、今も頭の中をめぐる一つの賛美があります。 その賛美は、私が初めて知った曲であり、この修養会で何度も歌った曲でした。 タイトルは「主の恵み」で、歌詞は「今までのすべてが主の恵み、神の子とされてる主の恵み、ここにいることさえ主の恵み、主の恵み、主の恵み」と「主の恵み」というフレーズが繰り返されています。 当たり前に思える日常が当たり前ではないという、当たり前のことに気づかされた賛美です。

今回夫がマウントハーモン修養会日語部での講師として招かれたことによって、初めてこの修養会のことを知りました。 夫の母方の祖父がJEMSにお世話になっていて、長く関わりがあったことも聞きました。 奥様も一緒に来てくださいとお招きいただいたおかげで、修養会に私も参加することが出来、大変感謝でした。

アメリカは25年ぶりでした。 日本の夏とは気候が違い、朝晩はトレーナーが要る程気温が下がり、日中は日差しが強くても日陰に入ると涼しく、とても過ごしやすかったです。 山に囲まれた地で、そこから30分ほど歩くだけで山の頂上（十字架がある場所）に着き、下界が見下ろせます。 神戸にも山がありますが、それとはまた異なる不思議な場所だと感じました。 久しぶりのアメリカの食事も美味しく、パンケーキ・リッジという場所での朝食ではパンケーキの大きさに驚きつつも2枚を完食し、B.B.Qのリブも美味しくいただきました。

修養会では初めて出会う人ばかりでしたが、私を前から知っていたかのように、親しく話しかけてくださり、その距離の近さにとまどいつつも嬉しかったことを覚えています。 日本の教会では祈祷会や礼拝に来られた方たちにお声をかけ、お話を伺います。 また神学校では学生たちの生活などを見て、個別に学生から話を聞いて一緒にお祈りをしています。 私の日々の生活では相手の話を聞くことが多く、自分の話をすることが少なく、このような機会はありませんでした。

今回初対面にも関わらず「馴れ初め」についてまで聞かれてびっくりしましたが、このことをきっかけに自分のことを話すことができ、私自身どのようにしてイエス様に出会うことになったのかを再確認することが出来ました。 また、参加されている方たちもそれぞれご自分のことをお話ししてくださり、皆さまの人生について、一部分ではありますが知ることが出来ました。 私と同じように「世界平和統一家庭連合」（旧統一協会）から救出された姉妹とお会いできたのは驚きでした。 しかも、同じような時期に統一協会にいて活動していたことが分かり、共通することがたくさんありました。 統一協会ではマインドコントロールされ、そこで教えられることや行動だけが正しいと思い込まされていました。 協会の活動は自分だけでなく、家族、世界の人々の幸せのためであると信じ込んでいたので、私は自分の力で統一協会を辞めることが出来ませんでした。 そのような辛い経験も癒され、姉妹と思い出話として笑いながら楽しくお話できたことは、とても感謝でした。

集会の前には証をさせていただく機会も与えられ、まだ私が神様を知らなかった時から今に至るまで、導いてくださった主のご愛と恵みを覚えることができ感謝でした。

冒頭の賛美の歌詞のように今までの出来事すべてが主の恵みです。 これからも、嬉しいことだけでなく、悲しいこと、どうしてこんなことが私に起こるのだろうかと叫び嘆きたくなるような出来事が起こるかもしれません。 病を癒すことも、回復させることも、何でもできる神様に信頼し祈っても、それが私たちの願い通りに叶えられないことがある現実の中で、ただただ悲しみに打ちひしがれるだけかもしれません。 けれども、そのような私たちを知ってくださる神様は、私たちのうめきと共にうめいてくださる聖霊を与えてくださり、そこに神様の栄光が現されること、そこで神様のわざが進められること、だから希望があることを修養会で聖書から教えられたことを心に留めたいと思います。

今回時間切れで修養会の皆さまに「馴れ初め」までお話しできなかったのは残念でした。 またお会い出来ることを主に期待しています。 その時には聞いていただけたらと思います。

降り注ぐ神の愛

Canyon Hills Community Church　ハインズ 好子

JEMSマウントハーモン修養会には今年で4回目の参加となりました。 2018年、2019年と続けて参加し、昨年75周年という記念すべき年に再び参加しました。

今年の日語部の講師は鎌野直人牧師でした。 修養会テーマ聖句の詩篇71篇5節「主なる神よ、あなたはわたしの若い時からのわたしの望み、わたしの頼みです。」から、全6回にわたり「希望」についてのメッセージが語られ、これまでにない新しい気づきを与えられ、私を含め参加者一同に多くの恵みと励ましがもたらされました。 特に、先生は毎回決められた時間内で完璧に話をまとめられ、皆が感銘を受けました。

修養会は、日々の忙しさから解放され、ゆったりと流れる時間の中で、新しい人々と交わり、日本語で聞くメッセージや賛美を通して、聖霊様の語りかけと祝福を受け取れる場所です。 昨年は、福野牧師と長沢牧師が招かれ、聖霊様が大きく働き、恵みが雨のように降り注ぎ、抱えきれないほどの祝福を受け取りました。

例年、修養会は6月末に開催され、1月末に申し込みが始まります。 すぐに申し込みをしたものの、去年の大きな恵みをまだ十分に自分のものとしきれていないのに、また参加してただ受け取るだけで良いのだろうか、という思いがどこかにひそんでいました。 その後、諸事情で参加を考え直す時が何度かあり、祈り続けました。 6月に入り、飼い犬が癌と診断され、看病のため、ついに参加を諦める方向に傾いていました。 そんな矢先、スモールグループのお世話役をしてみませんか?と奉仕のお誘いをいただきました。 犬の世話のため参加すら難しいかもしれないことを伝え、お断りしましたが、もし参加できた場合にと、特別な配慮を提案していただき、チームの方々も祈りで支えてくださいました。 内心では、お世話役など務まるのか自信もなく不安でしたが、「私が弱いときにこそ、私は強いからです」(第二コリント12:10)という御言葉を与えていただき、私が弱い者であるからこそ、その証によって神様へ栄光を帰せるのだと、自信のなさが強みに思えました。

出発当日、犬の容態も落ち着き、マウント・ハーモンに向かう飛行機の中で、感謝の祈りと共に、謙虚さを求めるよう示され、自分の力に頼るのではなく、謙遜で従順であるようにと祈りました。 私たちシアトル組は、空港からレンタカーでユースキャンプの子供達を引率する予定でしたが、運転する予定の一人が飛行機に搭乗できず、運転できる大人が私だけだと伝えられました。 急遽、代理を頼まれましたが、祈りによって心が整えられていたため、「神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださる」(第一ヨハネ5:14)という確信をもって、祈りの答えだと引き受けることができました。 さらに今回は、仲の良い姉妹に誘ってもらい、思いがけず初めて賛美チームでも奉仕をさせていただく恵みに預かりました。 大好きな賛美を通して主を崇める奉仕に携われることは大きな喜びでした。普段歌わない日本語の賛美を覚え、練習し、毎日新たな気持ちで賛美ができたことは、大きな祝福でした。 「神よ　あなたに私は新しい歌を歌い　十弦の琴に合わせて　ほめ歌を歌います。」詩篇144:9

今回の経験を通して、修養会の土台を支える方達がおり、神様が表には現れない部分で、大きく働かれてることを体感できました。 特に思い起こされたのが、日語部ディレクターを21年間務められた中浜先生です。 実は私は初参加の年、英語部に登録していました。 初日にユースメモリアルホールの前を歩いていると、道が四方に分かれている分岐点に中浜先生が日語部のチラシを持って立っておられ、行き交う人々に声をかけていました。 不思議と引き寄せられ、今年は「大阪から来られた牧師」だと聞いた瞬間「絶対面白いはず!」と私の大阪人の血が騒ぎ、その場でお願いして、日語部へ変更していただきました。 あの時中浜先生が忠実な主の僕としてあの分岐点に立っておられなければ、今私はこうして証をお分かちすることもなかったでしょう。

私たちの神様は、たとえ小さな働きのようであっても、忠実に仕える者を喜んでくださいます。 過去3回にわたり、一方的に恵みを注ぎ続け、私のような者にも、主に仕える喜びを与えようと、その先に大きな祝福を用意してくださいました。 そのような愛に満ちた神様に感謝します。

JEMS日語部

JEMS日語部コーディネーター　藤本 三奈子

第76回 JEMSマウントハーモン修養会は、6月29日(日)から7月5日(土)まで開催されました。日語部の講師には、関西聖書神学校校長であり、日本イエス・キリスト教団神戸中央教会副牧師でもある鎌野直人先生をお迎えし、テーマ聖句「主よ、あなたは私の希望(詩篇71:5)」から、旧約聖書・新約聖書を通して神様の壮大なご計画を力強く語っていただきました。

また、木曜日の夜には、新山クレッグ・千咲夫妻が日語部マウントハーモン修養会の新ディレクターとして、按手礼を受ける祝福の時が持たれました。21年の長きにわたり、日語部のディレクターとしてご奉仕くださった中浜一郎師に心から感謝いたします。

2026年のマウントハーモン修養会は6月28日(日)から7月4日(土)です。日語部の講師には、豊田信行先生(ニューライフキリスト教会牧師)をお迎えします。申込み受付は1月下旬頃を予定しています。多くの皆様のご参加をお待ちしております。